



坪田先生に聞く SDGs 関連インタビュー第5弾 (2020年12月10日放課後取材)



パートナーシップを考える 身近な所から ひとりができること



インタビュー：M1A 神足佳音・M2B 菅野柚希

神足：先生は世界のことをとてもよく知っておられると思うのですが、今年世界的感染拡大となった新型コロナウイルスが世界に与えた影響、17番の目標の「パートナーシップで目標を達成しよう」にどのような影響があったとお考えですか？

坪田先生：まず、そんな難しいことは分からない。どうして17番の目標「パートナーシップ」を選んだの？

神足：17番の目標っていうのは、1番から16番を達成するうえで大切なパートナーシップの課題だからお話を聞きたいと思ひまして……。17番の目標は難しいイメージがありますし……。

坪田先生：17番の目標はすごく難しく感じるんだけど、この目標を達成するためのプロジェクトを立ち上げてオンラインで会議をして、たくさんの人を動かして問題を解決しよう！みたいと思うとなかなか手が出ない、と思わない？すごくハードル上がらない？難しく捉えるとすごくできる人が限られてしまう。だから私はこの目標は「一人じゃできないよ」ぐらいの意味だと思っています。SDGsって17の目標でしょう？皆もいろんな先生にインタビューしたり、「この目標を達成するためにどんなことをされていますか」って聞いてきたりしたでしょ。中学3年生の授業でもSDGsを取り上げたりしたが、今SDGsについて有名人をアンバサダーやSDGs大使などに任命して、SDGsを広める活動をしているよね。その人に「どんなことされているんですか？」って聞いたら「エコバック使っています」「レジ袋はもらいません」「食品ロスを減らそうと思っています」とか言っているのを聞いて、私は一人ひとりにできることってそのくらいしかないって思います。神足さんはどう思う？

神足：先生がおっしゃった通り、確かに一人が協力、協力って言ったところで、本人が実践してお手本にならないと誰も手伝ってくれないと思います。

坪田先生：菅野さんはどう？

菅野：私も一人ができることってあまりないと思います。でもそれを多くの人が実際に行うことが大切なんじゃないかと思います。

坪田先生：一人ひとりにできることは限られているよね。



坪田先生：逆に一人一人が遠慮なくレジ袋をもらって、遠慮なく食べ残しをして、遠慮なくエネルギーを使って、70億人がそうしてきた結果が今、この問題につながっているので結局は一人ひとりが小さなことをやっていくしかないって思います。パートナーシップっていうのは「人ひとりが頑張ってもこの問題は解決できないので世界の人みんなでやりましょう」という感じかな。一人で千歩を進むんじゃなくて70億人で一歩進んだほうができることって大きいという考えかな。

神足：このコロナ禍でそういう活動に影響はありませんでしたか？

坪田先生：一人ひとりがやることはみんなでやることと同じだから。例えば私と神足さんと菅野さんは接点なかったけど、それぞれが自分にできる小さなことを意識してやっていたらそれは3人がやっていることになるよね。お互いのことを何も知らないけど、でも同じ目標を意識してやっているから皆でやっていることになる。一人ひとりができることはすごく小さいけど、それを70億人分で何とかしようって思わないと。

神足：ここに私がいれば、世界の真反対の国とかは一度も行ったことはないですけど、その人達も同じようにSDGsに関係することを意識して取り組んでいけたら、パートナーシップにつながっているということですか？

坪田先生：うん、そう思ってます。みんなでやっているからね。

神足：直接会ったことがなくても、一人ひとりが取り組みをすることで17番の目標が達成されるということですか？

坪田先生：名前も知らない人でもその目標でつながっているという感じかな。例えば、自分の家の冷蔵庫に今週末までの牛乳と来週末までの牛乳があったとする。どっちから先に飲みますか？

神足：今週末までの牛乳を飲みます。



次ページへ続く

賢明人語

ボーイスカウト日本連盟は「活動的で自立したスカウトを育てる」ことを目標とし、SDGsを活動に繋げ、持続可能な社会の実現に努める。とある。私がこれを調べるきっかけとなったのは団の隊長の胸ポケットにSDGsのバッジがついていたからで、スカウトの活動と世間でよく聞くSDGsとの関連を知りたくなったからだ。▼キャンプ、ハイキング、募金。多くの人がボーイスカウトで抱くイメージはそうであろう。確かにキャンプにも行く、それに楽しい。しかしその目的は子どもたちの自主性や協調性、活動を通してたくましさやリーダーシップを育むためであるということも覚えていてほしい。男性のみと思っている人も多いが、私を含め女子も結構多い。▼知られていない活動もある。例えば街のゴミ拾い。新潟県では植樹活動、和歌山県の海岸清掃活動などもある。各団が自分の町と未来を守るための活動、SDGsにつながる活動を行っている。▼これらの活動は一人ではできない。それでは私個人ができることはないかを考えた。野外活動で燃える焚き火、寒い中暖を取ったストーブを見て思った。暖を取るなら「湯たんぽ」がいい。最初のお湯を沸かす以外はもちろん電気を消費せず暖かさが持続、CO₂も排出しない。個人でもできることが意外にあると感じた。▼ボーイスカウトの活動は「みんなで協力してできること」、身の回りの小さなことは個人でもできる。実際、世界には様々な問題がある。問題を大きく捉え、個人にできることはないときとあきらめるのではなく、一人ひとりができること、そして団結して何ができるかを考えるべきだ。今、私はSDGsのバッジを持っている。より良い未来のためにできることを考え続ける、何か付けたバッジに誓ったように思えた。(松村さくら)

坪田先生：じゃあ、今日のおにぎりを買う時に、今日の夕方までのおにぎり、明日の夕方までのおにぎりどっちを買う？

神足：今日のお昼に食べるから今日の昼までのおにぎりを買います。

坪田先生：それはSDGs、食品ロスとか意識してるんですか？

神足：当たり前で……

坪田先生：そういう考えの人が増えていくといいよね。自分の家の冷蔵庫だったら期限が近いものから選ぶけど、スーパーやコンビニだったら期限が長いものから選ぶ人が多い。世の中の人みんながスーパーやコンビニを自分の家の冷蔵庫だと思って買い物をしたら食品ロスは劇的に減るよね。みんなが小さいことをすることによって目標を達成できるっていうのはまさにそういうことだと思います。他にもちょっと値段が高いけど、この袋はリサイクルできる袋だから買う、ちょっと高いけどこっちの方が生産者のことを考えてつくっているから選ぶ。そういう選択を世の中の人ができるようになると、売る方も、製品を作っている企業もその考えを意識的に取り入れる。だからちょっと高くてもそのような商品を買えば、個人より大きな力を持っている企業を動かせる。みんながすることによって変わっていく。これこそパートナーシップだよ。

神足：では先生はほかに何か意識されていることはありますか？

坪田先生：特別なことは何もないよ。当たり前のことしかやってない。もちろんエコバッグは使うし、クーラーもエアコンもあんまり使わないし、山の不要な木を切って薪にしたりもする。するけど、自分一人だけの行動だけで変わるとは思わない。でもみんなで作ったら変わると思う。

神足：もし、またコロナのような直接人との関わりが少なくなる時期がきても、一人ひとりの意識と行動があれば……。

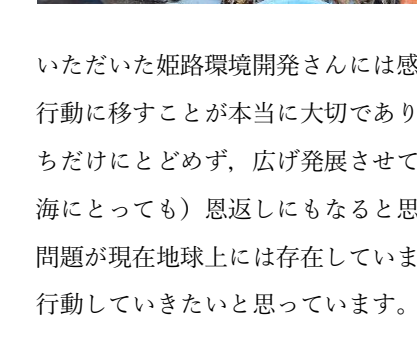
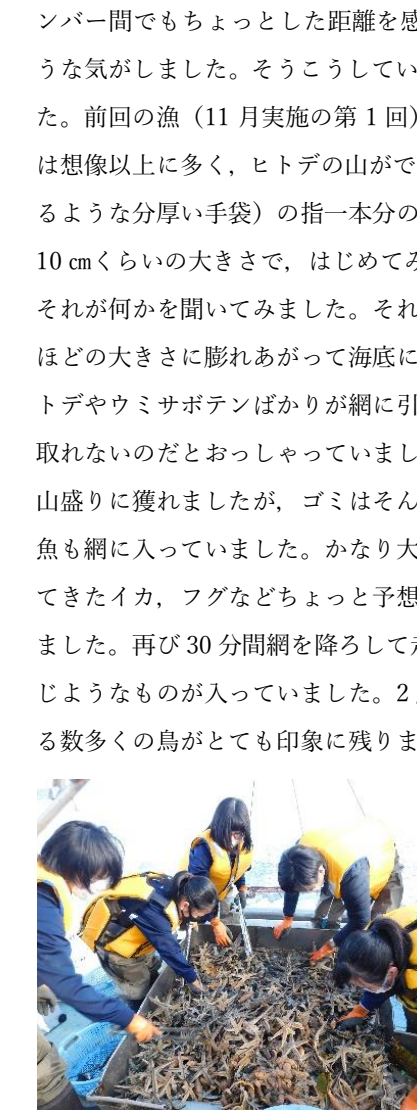
坪田先生：SDGsの達成のためには、勉強したり、友だちにやさしくしたり、ゴミが落ちていたら拾ったりすることが、みんなにとって当たりまえになること。みんなはせっかく質の高い教育を受けられる環境にいるのに、授業に集中しないとか、宿題をしないとか、提出物を出さないとか、それはもったいないよね。それは食品ロスと同じこと。世界には勉強したくてもできない人がいるのに、その機会を廃棄する「勉強ロス」だと思う。クラスで協力できないのに「パートナーシップで目標を達成しよう」なんて言えないよね。まずは身近なところから。

神足：コロナ禍を通して、結果として気づけたこともあるんですね。私も学校が休校になってありがたさに気づきました。今回、インタビューを通して17番の目標を身近に考えることができるようになったと思います。ありがとうございました。

次号も乞うご期待！（記事編集：菅野柚希）

第2回海のごみ調査隊 海洋ゴミ問題を考える 海底ごみ調査 播磨灘沖で底引き網漁（姫路環境開発さんのご協力）

12月7日月曜日、中学2年生3名（菅野・平山・藤原）、高校1年生から2名（池澤・平山）の計5名で姫路環境開発さんのご協力のもと「第2回海のごみ調査隊」の底引き網漁に同行させていただきました。当日はテスト最終日。私たち生徒の顔には少し疲れたような陰りがありましたが、天気は私たちとは正反対、雲一つない快晴で、風もほとんどなく漁には絶好のコンデ



イションとなりました。自ら参加を申し込んだものの、このような初めての経験に、生徒一人ひとりが期待と不安、そして使命感、それぞれの気持ちを秘めて港に向かいました。14時ごろに妻鹿漁港に到着し、日が暮れないようにとさっそく船に乗り込みました。乗船後、環境開発さんからウェーダーとライフジャケットを貸していただきました。心地よく揺れる船上で着替え、簡単な自己紹介をしました。姫路環境開発の職員の皆さんとだけでなく、学年の違うメ

ンバー間でもちょっとした距離を感じていましたが、広大な海を進むにつれてその距離もどんどん縮まってきたような気がしました。そうこうしているうちに網入れ。それから30分程走行してよいよ1回目の網揚げとなりました。前回の漁（11月実施の第1回）の結果を聞いていたのでどれほどのヒトデがいるのかと身構えましたが、それは想像以上に多く、ヒトデの山ができるほどでした。ヒトデの他にオレンジ色のゴム手袋（野菜農家の人が使っているような分厚い手袋）の指一本分のようなものも数多く網には入っていました。

10cmくらいの大きさで、はじめてみる物体に、環境開発の方（船長さん）にそれが何かを聞いてみました。それはウミサボテンの仲間、海中では3倍ほどの大きさに膨れあがって海底に生息している生物だそうです。海底のヒトデやウミサボテンばかりが網に引っ掛かって、さらにその下にあるゴミが取れないのだとおっしゃっていました。今回の漁でもヒトデやウミサボテンが山盛りに獲れましたが、ゴミはそんなに多くは取れませんでした。もちろん、魚も網に入っていました。かなり大きなエイや、私たちに向かって墨を飛ばしてきたイカ、フグなどちょっと予想と違った魚が取れたことに気持ちは高揚しました。再び30分間網を降ろして走行し、2回目の網揚げ。結果は1回目と同じようなものが入っていました。2度の網揚げの際に、船に向かって飛んでくる数多くの鳥がとても印象に残りました。ウミネコです。何十羽と迫ってくる

ウミネコはとても迫力があり、何か漁師さんの普段の目線を味わうことができたような気がしました。

今回はこれで終了、無事漁港に戻り、今回の振り返りを行いました。漁の感想、取れたゴミの調査。今回もゴミの量は少なかったですが、プラスチックのゴミはやはり網に入りました。やはり海に人工的なものがあるということが問題です。人間の無責任な（小さな）行動が地球にとってどれほど大きな悪影響を与えているかを考えなければならぬと改めて思いました。今回の経験は本当に貴重なものです。それをさせて

いただいた姫路環境開発さんには感謝の気持ちでいっぱいです。その感謝を行動に移すことが本当に大切であり、今回高まった私たちの意識を、自分たちだけにとどめず、広げ発展させていくことが（環境開発さんにとっても・海にとっても）恩返しにもなると思います。海洋問題だけに限らず、様々な問題が現在地球上には存在しています。私たちBe Leadersは少しでも考え、行動していきたいと思っています。自分の行動が人に、地球にやさしいか、



そんな気持ちをいつも持ち続け、そして一人でも多くの人がその気持ちを持ってほしいと思っています。継続してゴミでオブジェをつくる。この活動がそのきっかけになればと願っています。

いただいた魚（チヌ、マゴチ、ホウボウ、イカ、カレイ）はおいしく頂きました。海の恵みにも感謝。

（記事 池澤舞香・平山百夏）



第2回の漁で回収したごみです。ビニールごみ7、ひも2本、ペットボトル1本、プラごみ1、石1、くつ下1、ガラス破片1、木14、貝殻1
中庭に（乾燥）展示中。

ベルマーク班 過去に集めていたものも集計 今後も継続を決意

これまで集められ、集計されていなかったものも含め集計したベルマーク班。その集計が一区切りついたのでインタビューさせていただきました。ベルマークは点数、種類ごとに用紙に貼り付けて集計していきます。かなり大変な作業。作業中に取材さいた際には4名で作業されていました。（写真：M3 藤田さん・赤松さん・小西さん・田中さん）

Q1 ベルマークの合計はどれくらいになりましたか？ A1 21749.1点

Q2 集まったベルマークの点数はどのように活用しようと考えていますか。

A2 学校の設備などに使うのもいいなと思いましたが、やっぱり Be Leaders なので世界に目を向けることにしようと思いました。学校で取り組んでいる DeAR 募金のように貧しい国の子どもたちに送ったり、服などを買ってその服を送ったりしたいと考えています。

Q3 この活動にける想いを教えてください。

A3 今回、集計したものは全部過去のもので、元々賢明で約10年前に集めていたベルマークなんです。その代の方々が面倒臭くなって辞めちゃったらしいんです。そこで私たちが全部集計しました。今から、全校生の皆さんにやっと呼びかける準備が整った、やっスタート地点に立てた感じです。今回の集計が終わった時に達成感がすごかったのでこれからも頑張りたいです。

Q4 今後の目標を教えてください。

A4 今たまっているのが約30万点なので出来れば100万点、1億点、1兆点とか集めて何かに使える分だけ集めたいです。海外の子どもたちに何かをしたら沢山のベルマークが必要となると思うので全校生とに呼びかけて頑張ろう！って感じです。



Q5 ベルマーク回収に協力して下さった方々に一言お願いします。

A5 同じ Be Leaderd の人達でも呼びかけたらすぐに協力してくれてありがたかったです。ベルマーク班は人数が少ない割にがんばったと思います。

Q6 最後に一言どうぞ。

A6 全校生の皆さん、この活動は継続していきたいと考えています。いろいろ工夫もして収集していきたいと思っています。これから何かご協力を呼びかけることがあると思いますが、その時はよろしくお願いします！（取材：藤原萌衣）

